

「際立って秀でる」

ダニエル 5 : 30 - 6 : 3

March.22.2020

ダニエル 5 : 30 - 6 : 3 (パワポ)

Preface

人間の成す国や政権は、必ず最期を迎える時がきます。
恒久的に続くかのような気がしますが、必ず崩れ、移り変わっていきます。
国も代わり、政権も代わり、指導者も代わります。
権力は、この人からあの人へと、この国からあの国へと、続けて移り変わっていきます。

そして、バビロン帝国もその例外ではありませんでした。
バビロン帝国は、あまりにもあっけなくその幕を閉じてしまいました。

新興国家であるメディア・ペルシア連合軍の外からの攻撃もありましたが、その外からの攻撃に耐えうることの出来る盤石さもなく、むしろ、内側から腐敗している姿を前回まで見てきました。

バビロン帝国の最後の王であったナボニドゥスの子ベルシャツアルの自墮落さと高慢さゆえに、国が滅びていきました。

組織や国家の行く末は、リーダーの素行にかかっているばかりでなく、その霊的状态、いと高き唯一の神、主イエス様との親密度合いにかかっているという事をまざまざと思い知らされました。

もう一月ほど前になってしまいましたが、堅固で誰も落とすことの出来ない難攻不落の城郭都市であったバビロンの都がどのように破られたのかについて、お話しすると言って、触れることが出来なかったのも、まずそのことから触れていきたいと思えます。

Part One

少し思い出していただければと思うのですが、
バビロンの都は、周囲 90 km にも及ぶひし形に近い四角形の城郭でした（ここから水戸偕楽園まで直線距離 40 km）。
で、そのひし形の都城は、幅 20 m の流れの早い人工川に囲まれていて、ユーフラテス川から、引っ張ってきた水が、城郭の周囲を囲み、また、城郭内を突っ切るようにその水を引き入れていました。

もし、敵が城郭を取り囲んでいる川を渡ってくる事が出来たとしても、今度

は、幅3.7mの外壁と幅6.5mの内壁に、都城は守られていました。

幅6.5mだと戦闘用馬車が十分通れる幅です。

そして、敵が外壁をよじ登ってくることが出来たとしても、外壁よりも高い内壁から、戦闘用馬車でいくらでも上から下に向かって、矢を打つことが出来ます。

また、90kmの周囲には、20mを超える攻撃防御用のタワーがいくつもありました。

さらには、100個の水門を一斉に挙げると、都の中にまで引き入れているユーフラテス川の水が、一気に攻め上ってきた敵を飲み尽くすトラップまでありました。

こんな堅固な城郭都市を誰が破ったのか？

それは、バビロンの衰退を待ち、虎視眈々とその地位を狙っていたメディア・ペルシア（イラン）連合国の王、キュロス王です。

キュロス王は、バビロンの都を攻め落とすために、バビロン城郭に流れているユーフラテス川の水を断ってしまいます。

どう断ったのか？

バビロンの都に流れる川の上側、北側に、20万の軍隊を用いてあつという間に支流を作って、都に川の水が行かないようにしてしまいました。

そのため、難攻不落の城郭の核となっていた幅20mの川に水が行かず、川底が姿を現すのです。

そして、メディア・ペルシアの20万の軍隊は、悠々と川底を歩いて、城壁まで行きました。

でも、先ほどお話しした通り、城壁まで来ても、バビロン軍が城壁の上から総攻撃をかければ、まだまだ食い止めることが出来たのにもかかわらず、何の苦勞もせず、キュロス王の導くメディア・ペルシア連合軍は、城郭内に入っていました。

というのも、城主ベルシャツアルは、貴族1000人を集めて空威張りの虚勢を張った大酒宴を催すことしか考えられない不甲斐ないリーダーで、民衆は彼から心がもう離れていました。

逆に、敵軍であるはずのキュロス王に期待をかけるほどで、キュロス王こそ、そんな不甲斐ない政権からの解放者だとまで思っていたので、城門を民衆が開け放ってくれたのです。

キュロス王は、新しい時代の幕開けを期待させるような王でした。

事実、彼が建て上げたペルシア帝国は、ギリシャのアレキサンダー大王が出てくるまで続き、その領土の広さ、でかさは、バビロンを遥かに凌ぐ、インドから

始まり、旧メソポタミア文化圏、アフリカ大陸、小アジア（トルコ）、地中海周辺国家に至る大帝国を建立しました。

もしかしたら、あのネブカドネツアル王よりも優れていたかもしれないほどの人物です。

Part Two

そして、何とんでも、このキュロス王は、イスラエルの復興においても、とても重要な役割を果たした人物として、聖書に記録されています。

エズラ記 1 : 1 - 7 (パワポ)

キュロス王は異邦人でありながらも、その霊を主に触れられ、いと高き天の神が人間の国を支配し、みこころにかなう者にお与えになることを知る者でした。

ネブカドネツアルを凌駕する権力者であったにもかかわらず、自分の立場を、いと高き天の神の前に、わきまえることの出来る人でした。

それまでの権力者とは、霊的次元が違いました。

そして彼は、エルサレムと神の宮が荒廃しているのを知り、真っ先に、神の宮の再建に取り組もうと、ユダの民たちの帰還を許可します。

しかも、経済的にも支援し、それに必要な資材まで、すべて支援しました。

キュロス王は、神を礼拝することこそ、人としての基盤を先ず整えることであって、人の生き様を左右するものだと知っていました。

だから、そのために心を尽くし、力を尽くし、財をも尽くして礼拝する場を整えるんです。

Part Three

そんなキュロス王なのですが、今日の聖書箇所ダニエル書 5 章と 6 章には、その名前が登場してきません。

確かに、バビロンを倒したのはキュロスであるはずなのに、キュロスの代わりに、王として出てくるのが、メディアのダレイオスという人です。

ダニエル 5 : 3 1 - 6 : 1 (パワポ)

確かにバビロンは、キュロスの手によって倒されたのに、その国を受け継いだのはキュロスではなく、メディア人ダレイオスと出てきます。

どういうことかと言いますと、このダレイオスは、キュロスのおじさんにあたる人なんです。

メディア（北）とペルシア（南）、（両方とも今のイラン）の王族が政略結婚を

するのですが、この時生まれてきた王子がキュロスなんです。父がペルシアの王であり、母はメディア王の娘でした。

この時、ペルシアはメディア王国に従属する小国に過ぎなかったのですが、両家の血が通っているキュロスは、**BC 559年**に、まずペルシアを制圧して、ペルシアの国力が増すとともに、**BC 550年**には、今度は、北のメディアを制圧しました。たった9年間の間に、メディア・ペルシアを傘下に治めるのです。

そして、連合国として、メディアの軍事力をペルシアに引き入れ、当時中東世界で最も裕福な国だったリディア（トルコ）を制圧し、そのリディアの富を用いて、国力を養ってから、ついに、時の覇者バビロン王朝を**BC 539年**に制圧します。

キュロスはとても賢明な人で、制圧すると言っても、バビロンに属する人々や文明文化を滅ぼすようなことはしません。

バビロンの都を占拠すると、首都をペルシアからバビロンの都へと移すんです。せっかくの難攻不落の城塞都市を使わない手はありません。

ペルシアという、片田舎の小国の王ではなく、中東世界の心臓部に拠点置くことをもって、これから始まる快進撃を宣言するような姿勢を見せるわけです。

ひとまずの臨時首都をバビロンの都に構え、ペルシア帝国の臨時政府を構成しました。

でもキュロスは、まだまだこれから征服していかなければならない国々があります。

その間留守にするバビロンの臨時首都、臨時政府の王として、自分の母方の叔父にあたるメディア人のダレイオスを立てるのです。これをもって、メディアの面子も立ててあげるわけですね。

このペルシアの臨時政府は、2年間続きますが、今日の聖書箇所の内容は、この2年間の間に起こったことなんです。

Part Four

で、この新政府の要人として立てられるのが、ダニエルなんです。

ダニエル6：1－2（パワポ）

62歳にして、新政府の臨時ではありますが、王を任されたダレイオスは、気負っていたかもしれません。

飛ぶ鳥を落とす勢いの明けの明星のようなキュロスに指名されて、いいとこ

ろを見せなくちゃと、鼻息が荒かったかもしれません。

ダレイオスは、国を120に区分して、それぞれに地方総督を立てました。さらに、その上には、3人の大臣を置いて、新政府の国政担おうと構成しました。

この構成の目的は、「王が損害を被らないようにするため」でした。ここで言う、損害とは、経済的損害のことです。

結局、国政を担うリーダーに期待されているのは、経済力ですね。

あのヨセフも、経済政策の提案とその実践において、卓越した能力を発揮して、エジプトのNo.2として、実権を握っていました。

ダニエルも、経済的リーダーシップに長けていた人だったようです。そして、ダニエルがスカウトされました。

大帝国バビロンの都の新しい主人となったペルシアですが、一朝一夕にその大きな社会システムを把握し、掌握することは出来なかったのでしょう。

そこで、その新政府の台所事情を担える人材を探したはずですが。

でも、それには、色々と厳しい条件があったはずですが。

出来れば潔白で、信頼でき、知恵もあり、経験もあり、人望もあり、実行力も伴う。

罪な世の中、こんな人は、なかなかいません。

でも、調査をしてみると、一人浮かび上がってくる人物が出てきます。

82歳のダニエルです。

ユダの捕虜出身だけれども、あの偉大なネブカドネツアル王のもと、高位高官として長年勤めあげ、しかも残された記録を探してみると、天下のネブカドネツアル王でさえも、彼の前にひざまずかせるほどの知恵に満ち、

ベルシャツアルの乱痴気騒ぎでは、権力の前におもねることもなく、バビロン帝国の最後を警告し、予見した人物。

ダレイオスにしてみれば、これほど興味深い人はいなかったでしょう。

半信半疑だったけれども、ダニエルの持つその霊的気迫と、静かだけれどもまことの神をまことに信じる人の恐れのない目の輝きを見て、三人の大臣の一人として、立ててみようという気になったのかもしれない。

人間的に見たら、これすべて、全部ダニエルの能力のように思えてしまうかも

しません。

でも、もし、これが全部ダニエルの能力によるものであれば、全くもって希望がないですね。

私が最近、神様に涙ながらに訴え、祈るのは、「イエス様、僕は全くもって、ダニエルのように生きることが出来ていませんし、これからも生きていく自信がありません。ヨセフのように、侮辱と屈辱と束縛を辛抱しながら、ただただ主を待ち望みながら生きる生き方をしてきてはいないですし、これからもそんな風に生きられるのか、自信もありません。イエス様のようになんか、到底生きられません。」という祈りです。

そんな祈りをささげると、必ず、「大丈夫。わたしがあなたを選んで、わたしがあなたを助け、わたしがあなたを導くから。弱い時にこそ、わたしの恵みを知ることが出来る。」というような声と言いましょか、思いが湧きあがってくるんです。

そこで、気付くわけですね。

「ああ、ダニエルは、ダニエルだからダニエルなんじゃなくて、神様がダニエルを、ダニエルにしたんだ！」ということです。

私が日本に帰ってくるちょっと前から、毎週英語と韓国語で書いたコラムを送ってくださるアメリカで牧会されている牧師先生がいらっしゃるのですが、この方の柔和な雰囲気と、まことの神の人が持つ静かに輝く目が移っている写真を見るだけでも、涙が出てくるほどに、感謝と尊敬の思いが起こるんです。

最近、また泣きながら祈った祈りが、「イエス様、なんで僕は、この先生のようにリーダーシップに長け、知恵と努力による文章力に溢れ、人柄と配慮に満ちた愛の人じゃないんですか！僕だってこんなクリスチャン、牧師になりたいんです！」という祈りです。

そしたら、こんな思い（声）が湧きあがってきます。

「大丈夫。今、わたしのわざは、あなたにもなされているから。待ちなさい。」

そうなんです。

全部、神のわざなんです。

ダニエルをダニエルにしたのは、ダニエルではなく、神なんです。

神様の導きであり、いと高きイエス様の摂理の中で行われたことですね。

Part five

神様の御業、神様の摂理でなければ、そんな品性が練られるわけもありませんし、没落した王朝・政権の引退して30年も経つ元高位高官が、新王朝・新政権

の第三の権力者という地位で復帰するというのは、不可能なことです。

逆に、煙たがられてもおかしくない存在です。

私たちの見識からすると、ふさわしくないし、引き際だと思っても、神様が押し入れる時があります。

自らの歩みを、自らの思いだけで選択してはいけないんですね。

ダニエルは、自ら引退したと思いましたが、神様は違いました。

引退のことを、英語で **retire** と言いますが、そのものずばり、引退は、新しい神様のタイヤに履き直すことですね。

ダニエルは、あれよあれよという間に、神の手によって、神の新しいグリップのいいタイヤに履き替えさせられていました。

権力の手綱を引っ張ったからとか、展望のある派閥に属していたから、出世したわけでもありません。

じゃ、なんでこんなことになったのか？

ダニエル 6 : 3 (パワポ)

ダニエルの能力は、字面通り・文字通り、他者とは全く次元の違うものでした。どう次元が違うのか？

彼の内には、すぐれた霊が宿っていました。

つまり、聖霊に満たされていたのです。唯一まことの神と、まことの交わりを持ち、それゆえに、聖霊に満たされていました。

彼の次元は、本当の、まことの、唯一の霊的次元です。オカルトじゃないですよ。

でも、その周りを取り囲んでいる次元は、人が掻き鳴らす偽りの次元です。

彼にとっては、御言葉に、祈りに、勝る知恵も知識もありません。

御言葉と祈りに精通することが、すべての世の知恵と知識を、上から見下ろすことになるのです。

神学生の時、伝道師として働いた教会の牧師夫人が、私の家内に口酸っぱくおしゃっていたことがありました。

「聖書に全部あるから。聖書を読まなくちゃだめよ。子育ては、聖書ですの。」

この言葉は、その牧師夫人オリジナルではありません。

神様オリジナルです。

神様は、イスラエルの民たちに、このこと「聖書に全部あるから。聖書を読まなくちゃだめよ。子育ては、聖書ですの。」を何度も、何度も、何度も、伝

え、聖書にも記録しました。

なのに、イスラエルの民たちは、御言葉と祈りに精通するよりも、世の知恵を蓄え、世の知識に酔い、子どもたちにも、世の知恵と知識を蓄えることを優先させて、御言葉と祈りに精通させるために財を使うのではなく、世の知恵と世の知識を蓄えさせることに財を使って、結局、家庭が、家族が、組織が、地域が、国が滅びてしまいました。

そして、滅びたイスラエルの民であったダニエルは、捕囚生活70年を通して、世の知恵と知識を蓄えそれに生きる滅びの生き方ではなく、神の御言葉と祈りに精通することを実践して、繁栄する生き方を体現しました。

神様は、ダニエルを通して、神の御言葉と祈りと礼拝と交わりに生きることこそ、幸いであり、どんな逆境でも乗り越える力の源であり、繁栄が伴うことまでも、今一度、示してくださいました。

Part six

人の能力は、環境が変わると発揮できない・されないことがあります。日本で大活躍したプロ野球の選手が、大リーグに行って、全然全く振るわなかったなんてことはざらにあります。

プールでは泳げるけど、海ではちょっと。前の会社・学校では良かったけど、今の会社。学校ではちょっと能力を発揮できない、なんてことはよくあります。

ダニエルは、違う政権・王朝、違う言語、違う文化、違う人脈に置かれたのに、たちまちその能力を発揮しました。

その能力の秘訣は、聖霊の満たしです。

つまり、どれだけ神様と親密な関係を持ち続けたかという事です。

ダニエルの能力は、どんな教育機関も、どんな人も与えることの出来ない、聖霊によってのみ与えられる卓越性でした。

でも、この卓越性は、一朝一夕にはなりません。

80年間人生をかけて、毎日、神様との交わりを通して、生きてきたゆえの結果です。それが、ただ、出力しただけです。

私たちの敵が誰なのかは、関係ありません。

私たちの競争相手が、どれだけ優れているのか、分析する必要もありません。

私たちの中に、神のすぐれた霊が宿っているなら、どんな敵であっても、どんな環境であっても、光を放ち、際立って秀でるんですね。

第一コリント3：16 (パウロ)

2500年前、ダニエルの内にいてくださった、全く同じあのすぐれた霊であられる神の御霊が私たちの内にも、住んでいてくださいます。

そして、これを信じて、毎日御言葉を食し、深い祈りをもって主と交わるなら、聖霊のご臨在が、火のような力をもって、現れるでしょう。

でも、薪がなきゃ火が付かないように、御言葉と祈りが積まれなければ、燃えようにも燃えません。

使徒の働きでも、祈りと御言葉に10日間専念していたところに、聖霊が臨んでくださいました。

ダレイオスは、ダニエルの能力に呻りました。

ダニエルという人の力ではなく、神の力が、出てくるわけですから。

ダニエルが際立って秀でていることを知ったダレイオスは、ダニエルのために、新しいポスト、地位を作ってしまう。

ダニエル6：3 (パワポ)

ダレイオスは、組織の構造まで変えながら、ダニエルのために新しいポストを作り、ダニエルにその地位につかせました。

本来、3人の大臣というのは、一人の人に権力が集中してしまうことを防ぐためのシステムでありましたが、そのシステムを変えてまでも、ダニエルに特別な権力を付与してしまうんです。

多くの人が、地位やポストが欲しいと願い、環境と条件さえ整えば、何とかなるのにとおもいますが、

私たちが地位やポストに欲を出す暇や、環境とお金さえあれば何とかなるのにと愚痴る代わりに、与えられた地位と環境で、神のすぐれた霊に満たされるために、専念するならば、無かったポストも、社会構造を変えてまでも、神様が用意してくださいます。

まことの神の人は、宝石です。

どんなところに投げ入れても、その輝きを放たずにはいられないですし、その輝きゆえに、必ず、誰かが気付くようになっています。

人脈や、学歴や、賄賂や、自分の能力で上がったたり、上ったりする人は、環境が変われば、失墜します。

しかし、神のすぐれた霊であられる聖霊によって、上がる人は、どんな環境に

あっても、なかったポストまでその人のために作られ、引き上げられていきます。

有名になること、賞をもらうこと、高い地位につくこと、安定した収入を得ることなどに、躍起になったり、気を揉んだり、時には気を病んだりする必要はありません。

聖霊の満たしを人生の優先順位のトップに置いて、そのために心を、いのちを、知性を、財を尽くすならば、いるべきポストは、神様がその時々によって、判断してセッティングしてくださいます。

Conclusion

だからと言って、努力を怠ることを聖書が推奨しているわけではありません。むしろ、神にあって大いに努力しなさいと言います。

あるキリスト教系の雑誌を見ていましたら、あるクリスチャン企業の社長が、「今雇用しているクリスチャンの社員をノンクリスチャンに変えたら、職員の数をも1/3に減らせます。」という何とも衝撃的な文章を目にしました。

聖霊の満たしを人生の優先順位のトップに置くとは、「宗教活動に熱心になって、世の務めは疎かにしなさい」ということではありません。

御言葉と祈りに真に尽くすならば、世の務めを疎かにするということには導かれません。むしろ、世の務めを忠実に、誠実に果たすことをもってして、神を礼拝することへとつなげます。

だって、人の目を気にしながら勉強をして、仕事をするのではなくて、神の目を意識しながらするんですから。時には甘やかしてくださる神様の抱擁を期待しながら、励むことができます。

箴言6：6-11（パワポ）

ダニエルは、怠け者ではありませんでした。バビロンやペルシアの言葉を、学問を、経済を、政治を、文明や技術を、誰よりも熱心に学び、習得しました。

その秘訣は、聖霊の満たしを人生の優先順位のトップに置くことでした。

私たちの人生の優先順位のトップは何でしょうか？

神のすぐれた霊が宿り、満たされることを最優先順位に置く、神によって、祝福される人生を歩んでいきましょう。

お祈りします。

祝祷：ダニエル6：3